## コロサイ人への手紙　第３章２節　（天を仰ぐ）

主イエス・キリストを愛し、宣べ伝えるがゆえに囚われの身となった者からの勧めである。獄中から放たれる勧めである。残された地上のときが不明である。伝えたい事柄のすべてを届けられるほどゆとりがあるわけではない。不自由極まりないところからの勧めである。危機のなかで、緊急を要する、届けたいことがある。それだからこそあなたがたに、ただ、唯一必要なことを伝えたい真実がある。あなたがたに襲うであろう苦難の前に。

「地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」

過酷な状況にあっても、思うものがある。思えるものがある。むしろ、厳しさのなかでこそ、こころを、全存在を向けるところが明らかになる。決して地上を無視しなさいと言うわけではない。しかし、地上のものを思わない。地上のものに囚われない。牛耳られることはない。

私は囚われの身ではある。様々な障壁や不自由に直面している。しかし、その厳しい四面楚歌のなか、四方を格子と石で囲まれている今の私から、あなたに是非伝えたいことがある。届けたい真実がある。「地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」天を仰ぐとき、私たちは、いつも、どこでも繋がっていることを知る。